

高齢化社会をよくする 女性の会会報

No.31
1988年5月発行
高齢化社会をよくする女性の会
東京都新宿区新宿2-9-1
第31宮庭マンション802号室
TEL.03-356-3564

目次一

総会のお知らせ	1
男・老いを語る⑥ 花見 忠	2
福祉ツアー旅だより	3
前田恒子理事の急逝を惜しみて12	
グループ紹介	13
地域で老いを支える学習会	14
施設に思うこと	15
マリオン勉強会へのお誘い	15
入会者・住所変更者名簿	16
事務局だより	16

一九八三（昭和五八）年三月一日、東京・霞ヶ関ビルの東海クラブで「高齢化社会をよくする女性の会」の設立総会を開いてから、早いもので満五年の歳月が流れ去りました。

その間、「女性による老人問題シンポジウム」を六回、そのほか研究会、セミナー、講習会とさまざまな活動を重ね、昨年は在宅老人福祉の実態に関する自治体と要介護老人家庭の双方の調査を行い、またこの春はヨーロッパ老人福祉視察のセミナーツアーにも出かけてきました。しかし地域のサークルや自主グループとのネットワークをもっと強化していきたい

設立総会から満五周年！

——第六回総会へのおさそい——

たいと思いますし、出来ればその輪を海外にも広げたいと考えます。そしてより具体的な福祉施策を、女性たちの力でどのように実現していくことができるか、やるべき事柄はまだまだたくさんあります。住みよい、生き甲斐と活力あふれる老後を創りだしていくために、今年も大いに連帯し、大いに話し合って、力を合わせ、新しい方向を拓いていこうではありませんか。六月四日（土）の総会（詳細は14頁）では、いつものように活動報告、決算報告に続いて、今年の活動計画と予算を決めますので、どしどし建設的なご意見をいただきたいと思えます。

なお、総会に続いては読売テレビ制作のテレビ・ドキュメンタリー『絆あれば』を放映します。これは、岡山県で大変ユニークな活動を続けている老人病院、き

のこエスポワール病院の患者さんと医師たちの交流を記録した作品で、（地方の時代映像祭）優秀賞はじめ、いくつかの賞を受けたもので、制作者は伊豆百合子さんという女性ディレクターです。丹念な取材とユーモアを含む暖かい人間へのまなざしが感じられる作品ですので、どうかご期待下さい。

「絆あれば」より



産業化、国際化で崩れる終身雇用



上智大学教授（労働法）

花見 忠

筆者の小学校のクラスは、卒業後四五年も経った今日でも時々集まっておしゃべりする。

この会で密かに観察していると、あの時までには女性の方が年を取るのが早いように感じたが、最近では男性の方が定年になったり、窓際族になったりしてシヨボクレてきた。

逆に女性のほうは、子育てを終わり、解放感を味わって趣味や稽古事に打ち込んだりして、潑らつとしている。

この様な日本男子における、シヨボクレた老後は、主として終身雇用という日本の雇用慣行による。

つまり、人生を最もエンジョイすべ

き壮年時に、仕事だけエンジョイしてきたサラリーマン諸君は、突然生きる意味を失い、楽しめるべき「毎日が日曜日」が地獄の生活となる。これまでのサラリーマンの人生設計は、次のようであった。まず就学年齢の間は猛烈に勉強——就職したら猛烈に働き、以後勉強はしない——定年になったらな

にもしないので死ぬのを待つ。
平均寿命が六〇歳をこそこそであれば、「毎日が日曜日」の地獄も耐えられるが、平均寿命が急激に延長し、この地獄は気の遠くなるほど長くなってしまった。だから、男が老いなどを語ると話は湿りがちになる。

ところが、ここに世の小父さん方にとって朗報がある。これは、産業の情報化、国際化、労働力の高齢化と女性化という最近の傾向と係わっている。つまり、産業の主力が製造業からサービス・情報産業に、重厚長大から軽薄短小に移行するに従い、労働力の中核が、筋肉もりの成年男子工場労働者から、ホワイト・カラー（知的労働者）へ移行する。女子でも高齢者でも、知的能力では成年男子に劣らない。情報化と国際化で終身雇用が崩れ、臨時パート、派遣などの非典型就労が増大し、これが非典型でなくなる。男子も女子も職業生活の途中で充電のため学校教育に復帰したり、子育てに専念したり、あるいは大型の休暇を楽しむうになれば、老後は特別のことではなくなる。

ヨーロッパの老人福祉をみるセミナー・ツアー・リレー日記

ヨーロッパ福祉をこの目で見て—
私たちの見たこと・感じたこと

会結成五周年記念「ヨーロッパの老人福祉をみるセミナーツアー」の一行三五名は、三月一九日、春寒の成田を発つて、桜の蕾もようやくほころびはじめた三月三〇日、全員、無事かつ元気に帰国されました。

ストックホルム、フランクフルト、ロンドンなどの各地で見たり聞いたり考えたりしたこと、一端は、すでに朝日新聞紙上において「老いを支えるもの—ヨーロッパ福祉の光と影—」という同行の小林博記者の連載記事でお読みいただいた通りです。

ところで、この旅行中、事務局には毎日一通、参加者からのお頼りが、リレー形式の旅日記として届きました。会員の

みなさまにも旅の楽しさおよび見たこと聞いたことの片鱗を味わってほしいと、参加者の方々が忙しいスケジュールの合間を縫って、書簡箋にびっしりと思いをこめて書きつづって下さったものです。

紙面の都合で全文を掲載できないのがまことに残念ですが、ヨーロッパの風の匂い、街のたたずまいを想像しつつお読み下さい。それでは、出発進行、まずは出発当日から（藤久 ミネ）—

（写真①④⑨は朝日新聞社小林博さん、他は当会理事金谷千都子さん提供。）

一日目 （三月二〇日） ストックホルム

森と湖の国、スウェーデンは青い空と白い雪と輝く陽光の三拍子が揃っていて、メンバー一同「心がけ」「行い」の良さを自讃し合い、すっかり良い気分。



①セラファン・ナーシング・ハウスのぼけ老人病棟で

長旅の疲れと北欧の景観を小脇に抱えて、夕方はホテルで竹崎先生の講義を聞いたのですが、特に印象に残ったのは、老人は社会全体で看るものという定義が大前提にあつて、ボランティアに福祉を担ってもらうことは本末転倒だという考えが一貫して取られていることでした。この国の社会福祉はすべての国民が同じサービスを受ける権利を有し、そのため施策にボランティアが介入する余地は認められないようです。「違い」が分かり過ぎて、疲れがどつと出たメンバーが望む「福祉」は、ただひたすら足を伸ばして寝むること。二月三〇日、二〇時三〇分です。（新井 倭久子）

二日目 (三月二一日)
ストックホルム

Aグループ

午前中の保健福祉庁での講義を終えて、Aグループはバスで市内のサービスハウス内のレストランへ向かった。

このサービスハウスは一九八四年に開設された新しいもので、それ以前のものとは異なりそのサービスハウスの住人だけではなく、地域の必要とする老人たちにもサービスを提供するようになっている。

このレストランは建物の一階にあり、外から通ってくる老人の姿も大分みられた。われわれも同じメニューのものを食べたが、量がたっぷりすぎる程あり、メインディッシュの他に、アルコール類やその他の飲物、デザートつきで、食事の内容は豊かなものであった。

一食につき住人は二六クローネ(一クローネは約二二円)、外から来る人は三六クローネとのこと。

食事のあと、建物続きになっているナーシングホーム(医療機関)とサービスハウスの個人の部屋を見学した。

ナーシングホームでは、特にボケ老人の病棟を見せてもらったが、日本の病院のイメージ(ボケ老人用ではなく普通の病院のイメージ)とはほど遠い明るいものであった。

後で聞くと設計者は女性とのこと、一階から四階までのふきぬけの空間と放射状の病室の配置で施設臭の払拭をねらったとか。

アニカ・タークマンという副院長の若い女性のドクターの説明によると、ボケ老人の生活にとって大切な三つのポイント①自分の洋服を来て洗濯も出来れば自分でする(ここには洗濯室があり実際に自分でする人がいる)②すべての人が定期的にトイレに行けるようにする(オムツに対する考え方が日本と全くちがう)③ねたきりにしないで、起きて一緒に食事をするようにさせる、とのこと。スウェーデンでも昔はベッドに老人をおいて食事などを運んでいたが、それは病気を進行

させることが分かり、今はやられていないとのこと。タークマン先生は、「ボケ老人でも心から笑うことが出来るもの、自分はそのような時間を味わわせてやりたい」と思ってこの仕事をしている」と話され、この言葉には深い感銘をうけた。

サービスハウスにしても個人の生活様式が大切にされていることが一見して理解されたが、個人の意見を尊重する社会でなければ、(日本などでは)とても考えられないことと思った。——しかし、それの方があたり前ではないかと、思わざるを得ないが。(角田 由紀子)

Bグループ

朝五時半、時差の疲れもなかったのか比較的すっきり目覚めました。

駅をでて街通りを歩くと車の流れがづづいています。スウェーデン人は年金生活に入る六五歳までよく働くときままですが、七時前の車の流れはその象徴でしょう。地下鉄へ降りるとエレベーターらしきものが見えました。ハンディキャプト用なのでしょうか。改札口の前にはスーパーマーケット、これももう開いていま

した。スウェーデン女性の就業率は七五%
だそうです。早朝のスーパーマーケット
の開店にも共働き社会に合わせた生活様
式を感じました。

九時半から保健福祉庁へ。入口には縫
いぐるみ(動物)が置かれていました。
日本の厚生省には絶対にはないものです。

パネルもあって組織図がわかりやすく説
明されています。廊下には休暇村(これ
も、スウェーデン語がわかりませんが)
そう受けとめたのですが、おそらく間違
いがないと思います)の広告、ちょっとビツ
クリしたのはその広告の下側に部屋の模
様やら料金を書いた部分があつて、一〇
人分くらいがその部分を切りとっていけ



②スウェーデン保健福祉庁での
ヤン・オーディング氏のレクチャー

るようになってきていることでした。

ヤン・オーディング氏(保健福祉庁副
長官)からスウェーデンの老人福祉施策
の現状、問題点についてお話をうかがい、
午後は、リオ・サービスハウスへ。(石毛
鏡子)

三日目

(三月二日
ストックホルム)

Aグループ

本日のAグループの行先はスウェーデ
ンのなかでニュータウンづくりが最も成
功したといわれるシスタ地区のサービ
スハウス、それに市立余暇センターであ
る。シスタはかつて軍用地であったところ
を三つのコミュニティ(市町村)が買いつ
つて共同開発したところ。街をつくるた
めに必要な産業、アパート街、ショッ
ピングセンター、集会所、レストラン、そ
して学校に隣接して老人サービスハウス
が建てられている。学校の隣だから生徒
と老人たちの交流も当然あるだろうと、
職員のミミーさんに尋ねたら、「もちろん
それを望んでいたんだけど、老人の方が



③リオ・老人サービスハウスのアクティ
ビティルームで手芸を楽しむ老人

どもに話すことに興味をもたなくてう
まくなかったの」と、改めて老人と若
い人との交流が難しいことを実感した。
午後から行った余暇センターは、アン
ティクなムードが漂うとても素敵などこ
ろだった。センターとってもビルは七、
八、九階を使用していて、広い喫茶室と
ホールを含んでいる。このビルは一〇〇
年前に建てられたもので、喫茶室とホ
ールはかつてダンスパーティーの場所でも
あったらしい。湖が見わたせる大きな窓
と壁の様子は部屋の中をとっても明るくし
ている。それに老人たちの楽しそうな笑
い声。この利用者は一日平均約五五〇
名で、女性が圧倒的多数を占めている。

スウェーデンの老人福祉の基本はとて
もすっかりしている。でも若い人は多額
の税金が払いやされることに不満をもっ
ていないのだろうか。わがバスの運転手
さんに聞いてみた。

「ぼくは収入の三五%を税金として払っ
ているけれど、福祉が充実するんだから
別にいいんじゃない。それに税金を下げ
て、この舗装された道路がボコボコにな
るようなことがあつたら困るよ」と、ロッ
ドスチュワートのような髪型をした二五
歳の運転手さんはいとも簡単に答えてく
れた。(小沢 明子) たけな

Bグループ

朝 ストックホルム三日目の朝、カーテ
ンを明けると粉雪が舞っていた。二日
間の青空が嘘の様にどんよりと灰色の
雲が重い空。

今日はまさしくスウェーデンの冬で
あつた。

夜 ストックホルムの帝国ホテルという
触れ込みの「鯨のバイキング」二十数
種類の中には、口に合うものもあるだ
ろうという、およそ大ざっぱな計算で

二百数十クローネをハタいてタクシー
で出かけた。

さすがに色とりどりの粧いを凝らし
た「ニシン様」にお目にかかつて少し
ずつうやうやしく味見をさせて頂いた。

それとは別に、十人程のテーブルは
話に花が咲いて、ストックホルム最後
の夜を飾った。(田中 蘭子) あま

四日目

(三月二三日
フランクフルト)

フランクフルト着 一時二五分。バス
にて丘の上のヘニング・ビール会社の二
八階のラウンジ・レストランでお昼を頂
き、居ながらにして、フランクフルト・
アムマインを空から拝見しました。

三時からのクボタ・A・ミュラー先生
の講演は、ちよつとむずかしい日本語で、
連日の疲れも手伝つて、うとうとする方
も見られました。お話の限りでは、日本
と同列で、殊に女性の高齢者の生活が困
難であるとか、同じ教育、職業でも、収
入が三〇%〜四〇%低いとか、老人ホー
ムへの入居に、一五年待たされた例もあ

るとか。

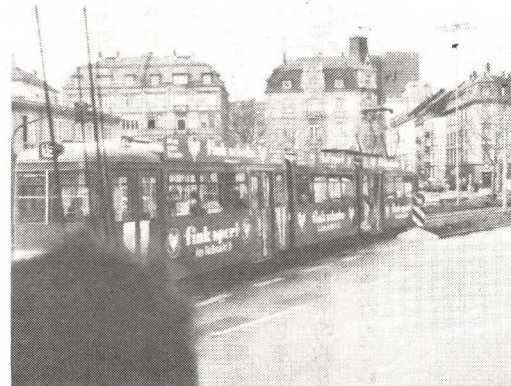
夕食前に一人一分の自己紹介。

一〇分持ち時間のA、B両班の代表発
表の後、次々に補足発表が続き、皆様の
熱気が感じられました。(飯泉 康江) あま

五日目

(三月二四日
フランクフルト)

この町での視察はフランクフルト市、
社会福祉局にて職員教育を担当してい
るフランツ・ポルデイン氏の講義である。
五〇歳と思えない若さと端麗な容姿の氏
の講義はまるで、どこかの国の役人とも
ちがえそうなほどに建前論で話すため、
聞いている私たちは、次第にイラだちと



④施設へ行く途中のフランクフルトの街並



⑤ マーバックウェイ社会センターで
ボーリングを楽しむお年寄り

疲れが感じられるようになってくる。

今日が日程のなか日とあつて誰しもが疲れが蓄積しはじめているのだ。午後の通訳のハール(男)さんは、私たちの近くに座っていて、「ドイツ人の私でもわかない」などとまぜつ返す。ポルティン氏の講義はおよそ次のようである。

教会に「一般寄付の箱」がつくられ、病院や孤児院がつくられた。現在もそれが引継がれ、住民は市民税をとられないが、国税として所得の1%を教会へ寄付するという形をとっている。これらの資金で財団をつくり、老人ホーム(住宅)などが作られている。

次いで女性のシライシさんから福祉の

具体的内容が話された。西ドイツの六五歳以上の老人のうち四・五%しか老人ホーム(住宅)に入所できない現状がある。他は自分自身で生活をしていく。2/3はひとり暮らしで1/3は家族と一緒にある。現状では八一歳、八二歳になってから入所する。それ以前は100%在宅である。従ってホームを建てるというのではなく、救急という形で救急病院センターの医療をうけるようになっていく。

このように一人一日四時間以下のケアであれば安くあがるとの統計が出ているが、ほとんどの人が四時間以上のヘルプを要し七〇〇〇〜八〇〇〇マルクの経費がかかる。

午後は老人ホームを見学、センター長のアンシットさんから話を聞く。センターは社団法人で作られ(二〇%程度株式会社)これに対する市の費用の援助については答がなかった。職員は市内に八〇〇人いるほか徴兵拒否の一八歳〜二〇歳までの人が二年間介護人として働いている。センターの特徴は①老人、身体不自由の老人が集まり、ボーリングのようなもの

や、プールがあり、PT、OTなどの指導を受ける。②近隣の人も処方箋によりPTなどの指導がうけられる。③意欲をもたせるための織物、彫刻などのプログラムがある。④市内に二つの総合センターがつくられ、老人のために弁当を二五〇〇人分、一日一食を毎日届けている。

ボケ老人は同敷地内の重度(自分で電気がつけられない人)の人のためのナースング・ホームに入る。費用は月額二〇〇〜四〇〇マルクである。(海老原 志づ子)

六日目 (三月二五日)
ロンドン

イギリスでは、自治体である区が福祉のノウハウを任されているのだから、イギリス区だけを見て、イギリスの福祉を論じてはいけません、と注意をうけながら、すてきな建物の一つ市役所へ吸い込まれました。

そこで、イギリスの福祉の講義をうけ、二班に別れた我々B班は、街並が次第に郊外の様相を呈するのを眺めながら走ります。

英国でも施設収容の方法は最適ではなく、どんな人でも、個人個人が尊重されるべきであるという考えの下に、できるだけ自宅におけるケアに向かっているが、最初思ったより多くのお金がかかるので、現在、押さえられる傾向にあるそうです。英国の医療省（NHS）が、蔵相がすべての人を対象に減税する、と言ったけれど、それを福祉の方へ回すべきだと抗議した話は、日本に届いているだろうか、ということですよ。

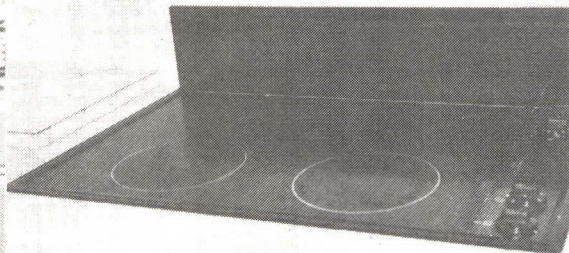
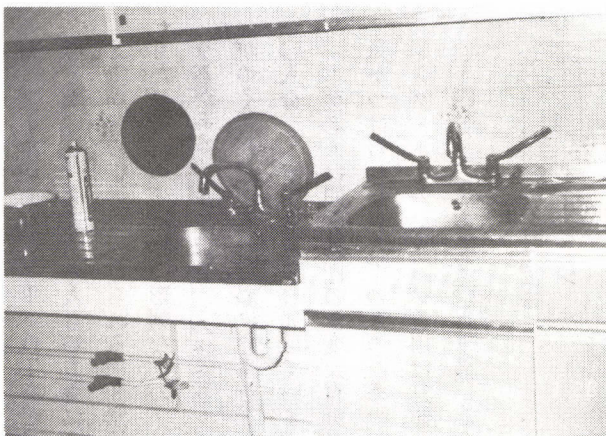
メグチCharter Court Houseは、さらに、このイーリング区を四つに分けた南西部Southall地区にあるシェルタード・ハウス（保護住宅）です。二年前に建てられ、戸数44戸、八〇歳以上がほとんどで最高九五歳。女性四五名でやはり多く、男性は七人、比較的病弱な老人のための住宅です。医療省のナーシング・ケアと社会福祉部在宅ケアを行っています。入居者はほとんどが白人ですが、アジア人も少しずつ増えているそうです。

脳卒中で右手が少し不自由ですがよくよかなニコニコアリスおばさんの部屋を

訪問しました。小さいがキッチンとしたキッチン（冷蔵庫は相変らず大きい）、居間、ベッドルームは、そう、小さいビジネスホテルぐらい、ピンクの目のさめるようなベッドカバーがすてき。テラスに出れば、お隣りさんやL字型のアパートのお向いさんと話すこともできます。

ヘルパーさんは五二名、対象者は地域を含め五〇〇人、ほとんどがパートタイマーだが、シェルタードハウスの中では二名がフルタイム、パートタイム四名です。サービスの内容は、日常生活の世話、洗濯、ショッピング、お使いなど家族がするようなサービスを週五日、菜食主義のアジア人、菜食主義でないアジア人もそれらしくつくるとのことでした。年齢は、若い人から育児を終えた人まで、年齢層には幅があり、払える人は月五・二五ポンドを徴収する。払えない人はもちろん国から出ます。

竹崎氏なら、男女差別が解消されておらず、女性がもつと収入の多い地位の高い職業につけないからだというだろうな、と思いました。（村岡 洋子）



⑥⑦障害をもった人でも炊事の可能なキッチン

家々の屋根は映画『メリー・ポピンズ』
そのままのチンチムニーが並び、あそこ
こはイギリスなんだとの思いを新たにす
る。イギリスの老人福祉の根本は、でき
るだけ地域社会で自立した生活ができる
ようにバックのサポートを充実させるこ
とだとの説明の後、二班に別れてシエル
タードハウスの見学に出かける。

スウェーデンの集合住宅を見て来た目
には、狭くうるおいのある感じは余りな
い。年金だけで市から援助を受けてくら
す労働者階級の人の住まいとか。それ
も前にくらしていた家に比べ快適な
しが出来て、体調が良くなったとおばあ
さんは喜んでる。

ヘルパーさんはスウェーデン同様、社
会的に低い地位で賃金も大変安く、今賃
上げの交渉をしているとのこと。

九年間ヘルパーを続けているトーマス
さんと一年間ヘルパーをやつて来た私と
お互いに頑張ろうねと握手で別れる。

帰りのバスの中、中産階級の人々はシエ
ルタードハウスには入らず、不動産を処
分したり、節約して貯金をためてプライ

ベートの有料のナーシングホームに入る
との話を聞き、日本と全く同じだなあと
の思いを強くし、改めてスウェーデンの
福祉のすばらしさを思った次第です。(米
沢 泰子)

七日目

三月二十六日
ロンドン

毎日のハードなお勉強で、少々消化不
良を起こしかけている私としては久しぶ
りの「ロンドンの休日」。こころゆくまで
楽しむつもり。

一行二名。ガイドさんは、ここロン
ドンで知らぬ者はないというガイドの主
のような存在(?)の矢田さん。ファイリッ
プさんという、女王陛下の御主人と同じ
名前の運転手さんの運転するバスで、い
ざ出発!

土曜日で、交通渋滞もいくらかましと
いうロードをひた走る。公園の緑の芝は
ベントという年中枯れない種類のものと
かで、その緑の中にかれんなラッパ水仙
が群生しているのは、ほんとに、プリティ。
たくさんの鈴をつけたプラタナスの木も

日本のものよりはるかに大きい。

まず到着したのは、テムズ河畔の国会
議事堂。典型的なゴシックの建物と、か
の有名な「ビッグベン」をカメラにおさ
めて、お次はウエストミンスター寺院。

入口附近は工事中とあって、ちよつと残
念だったが、中に入れば、さすが、さす
がと、ため息ができる。床といい壁面とい
い、史上の有名人の墓や、記念碑でうめ
られている。詩人コーナーの附近に一五
〇歳まで生きたというトマス・パー(オー
ルド・パー)おじいさんの墓碑名も並ん
でいたのは、ちよつと愉快だった。

歴史をおびた美しい建物や、数々の記
念碑の中にたくさんの植民地をもって世
界に君臨した大英帝国がある。「英国は斜
陽だ」などとかけ口も聞かれるが、決し
てそうではないと思った。二〇〇〇年か
かって築きあげられた強固な土台は、そ
んなふうに簡単にくずれそうにはない。(丸
林 和子 *丸林和子*)

今日は民営の退職者用アパート、クロ
フトハウスの見学です。自然環境を保全

するグリーンベルト地帯ののどかな農村風景を眺めながら目的地向かいました。

赤レンガ作りのハウスは、玄関とコミュニティルームと続き、その隣の食堂を中心に左手が、健康な老人用のアパート。

食堂の向いにナーシングホーム、老人ホームが連なっていました。

ここは、生活が自立できるうちは夫婦、又は独りで暮らし、介護が必要になればナーシングホームに移れます。

安全のため外部からの訪問者もインターホンでアパートの部屋に通じ、確認されてからドアが開けられます。その他に防火、コンセントの位置、暖房、台所、風呂、トイレの施設、設備も高齢者を配慮して作られ、緊急連絡ブザーもあり、二十四時間対応できるシステムが採られています。

一方、施設の職員として管理人、看護婦一人、介護人は朝五〜六人、午後四人、夕方と夜間各三人、掃除二人、調理人二人とその手伝い者一人、セラピスト一人、以上については定員になり次第配置することのこと。

ちなみに、アパートは定員二六人中、一七名の入居、ナーシング老人ホームには八人の定数に三人が入っているとの事でした。又、入居者の基準は夫の年齢が六〇歳以上であることです。

入居管理費は二五ポンド、さらにナーシングを受けると七五ポンド必要ですが、今の入居者で支払えない人はいないとのことです。

夫婦の一方が欠けても一人で住み続け、子どもは離れてゆくものという考え方が、一人立ちの姿勢と個人主義をつらぬくこの国の人達も、このアパートを選んだのは、娘や息子がこの地域に住んでいるからとの答えでした。いずれにせよ、個の確立、個人の尊厳には学ぶべきことがあります。

こうして見、聞きしながら、人間とは、家族とは、社会福祉とはなどと考えさせられた旅も残り少なくなりました。(桑原 イト子)

桑原イト子



⑧ウィンザー城

八日目

(三月二七日)

午前 ウィンザー城見学。くもり 風有。女王陛下が週末をおすごしになる場所の建物近く、ほとんど警備の方がいらっしやらないような状態で大勢の観光客を入れ、さらに真上を五分おきに飛行機が飛んでいくといったコースがゆるされるこの国のありようが、日頃の天皇家と私達の関係とは全く違っていて驚きでした。夕方、五時までに帰り、(ちなみにタクシーは人数割増だそうで日本のようではありません)皆様そろったところでミーティングが始まりました。

マッカーシー・ストーンのリタイヤメ

ントハウスの見学報告がありました。

人数制限があり、申込みをあらかじめなされた方が行かれましたので、行かれなかった方々に報告がありました。

パンフが、行かなかった方の分はなかったのでお話だけでは少しわかりにくかったです。又それぞれの方がその方なりに聞いてきていて、ずい分と見解に差がありましたので、聞く方はもう一つわかりにくい、難しいものだと思います。

今度の旅行は老人給食が見学出来るかと思っただけでしたが、配食ミールズオンウィールズを見学することが出来ず残念でした。

ホームヘルプと食事サービスが別立てになっていることはよくわかりました。(平野 真佐子)

九日目 (三月二十八日)

研修旅行の最終日。午前と午後にわたって三ヶ所を訪問し、六時半頃からホテルで「さようならパーティー」を開く。

午前中の訪問は、全員で、ロンドン、アクトン区にある虚弱老人のためのデイ

ケアセンター、ミッチェル・フランダーセンターへ。自立やりハビリのための多彩な活動等について全般的な講義を聞き、あとは中を詳しく見学。

並行して希望者だけで少し離れたイウォンさん(五五歳)の住居へ。脊髄神経マヒで車イスの彼女は、肢体不自由者専用のシェルタードハウスに一人で住んでいる。フランダーセンターのアドバイスでコンピューターを学び、自分でソフトを開発したこと。小型の(生活)環境コントロール・システムを使つての自立した生活ぶりは、さすがに圧巻だ。

午後からバスに少々ゆられて、エイジ・コンサーンへ。国際部と広報部の二人の女性の責任者からお話を伺う。具体的なサービスの提供から国際的な情報・交流活動まで、まことに幅広い活動をおこなっている。最後にさまざまQアンドAで締めくくる。

「さようならパーティー」では、代表や事務局の労をねぎらい、一行の健康管理に気をつけて下さったメンバの一人、田中医師に感謝。そして超ハード・スケ

ジュールを頑張った全員で拍手をしあつて、乾杯!(久場 嬉子) 夜、決

(付記)

お便り担当者は講義、見学、ミーティングと、かなりハードスケジュールの中で、ホテルの部屋に帰ればボタンキューと寝たいところを、寝ることもできず、二時三時迄かかってその日のことを書き綴って下さったのです。ほんとうにありがとうございました。(芹沢 茂登子)



⑨サヨナラパーティー

前田恒子理事の 急逝を惜しみて

当会理事、日本乳業協議会事務局長の前田恒子さんは、四月二十一日心不全で急逝されました。享年六一歳。北海道出張を翌日に控え、持病のぜん息の治療に「ちょっと行ってくるからね」と言い置いたまま、遠く旅立って行かれました。

前田恒子理事は当会の趣旨に深く共感し第一回シンポジウムから熱心に参加され、会設立にあたっては、長年の団体運営の経験を生かして、数多くのご助言をいただきました。とくに団体の信用の基礎は経理の厳正さにあるとして、設立当初から二期にわたって面倒な監査の役を引き受けて、不馴れな私たちを指導、監督して下さいました。

酪農ジャーナリストから出発して、ミス・ミルクと呼ばれるほど、乳製品普及に情熱を注いだ前田さんは、人生八〇年時代の食生活にも深い関心をお持ちでし



料理教室で

た。前田さんのご協力と示唆を得て、当会は、五回にわたり、男女共修の料理教室を開催、新聞にも取り上げられて話題を呼びました。料理教室の目玉は前田さんの食生活についての講演で、こうすれば健康な老後を創ることができるという、具体的で説得力のあるお話は、人を魅きつけずにはおきませんでした。

物心ともに当会に惜しみないご協力を下さった前田さんの、あまりにも早い突然の死は惜しみて余りあり、一同呆然としています。

私ごとですが、前田さんとの出会いは私が昭和三十一年、新入社員として時事通信社に入社したときで、前田さんはすでに敏腕の農政記者として活躍中でした。以来三〇年余、公私ともに叱られながら、いつも親切にしていただいた思い出は尽

奈木野敏子さんに感謝状

このたび奈木野敏子さん（奈良県在住）が母上ご逝去の際のお香奠の中から三〇万円を当会にご寄贈下さいました。奈木野さんは会員ではありませんが、老人介護のご体験を通して、新聞記事などから当会の活動に以前からお心を寄せて下さったそうです。私たちの活動がそのような注目を集めていることに責任を新たにす思いです。奈木野さんにはご厚意を深く感謝する感謝状をお送り申し上げます。

きません。

前田さんはつねに人の数倍のエネルギーをマイペースとし、人々を啞然とさせつつブルドーザーのように仕事をすすめて行きました。今回のご逝去もまだその続きのような気がします。前田さんはきっと私たちの心の中に生き続け、いつもの調子で活動を督励して下さいと信じます。

合掌。

樋口恵子

グループ紹介

郡山高齢化社会をよくする

女性の会

郡山市高田町字池向32-14 高橋方

昨年二月、郡山市が開催した豊かな高齢化社会のシンポジウムに樋口恵子代表の記念講演があり、福祉とはただお金を出せばいいというのではない、物中心の社会は去り、自分の足りない所は誰れかが補うといった相互互助の精神、これが福祉の基本ではないかと、仲間で結論づけました。そこで、郡山高齢化社会をよくする女性の会を設立いたしました。

最初の活動はシルバードレッシング作り。当初は難問が山積でしたが地道な運動が徐々に進んでおります。ちょうどそのとき郡山市では毎年恒例の「働く婦人の家」主催による「女性の祭典」——日頃郡山地域において社会活動や文化活動をしている女性グループによる成果や体験の発

表——があり、私たちがアピールするチャンスとして参加いたしました。発表の主眼をお年寄りが自由にのびのびと生きがいを感じながら、豊かに暮らせる街づくり、生きがい村づくりに絞り、提言しました。

1 お年寄りのケアーからエンジョイまで

2 お年寄りが社会活動へ参加できる街

3 お年寄りに一般教養講座の活性化

4 お年寄りの健康管理と生活環境づくり

5 中高年女性への老後教育

具体的には若い人達との交流の場をつくり、お年寄りの長い人生における体験を聞く定例会を持つことにしたのです。

次に特に地域の医療問題、高齢化問題で大活躍されている太田緑子先生が、高齢化する我が国の現状の今後の対応のため、オーストラリアに調査訪問に行かれました。その記録写真を展示しました。

それを通して感じたことは、一人一人の老人にきまったスタッフが付き、相談、買い物、家族との連絡を全部引き受け

ていること、牧師や精神科医師や、その他専門的に高度な設備をもつ親病院とタイアップして人生の最後まで老人が孤立し、不安におちいらす社会の中の一人として人間らしい生活が出来るよう配慮されていること、日本の極貧の者にだけいろいろと制限をつけおめぐみするというやり方ではなく、相互互助の社会保障が整っていることなどです。また、どの施設でも、所長を始め職員が、すべて女性であり、温厚で責任感が強く、洗練されていると伺い、私たちも老人生きがい村づくりのために、自分のもう一つの人生をかけようと誓い合ったのでした。

青木 千代美



地域で老いを支える 学習会

志津公民館館長 清澤 瞳子

千葉県佐倉市井野一〇八九一六五

佐倉市は人口二万二千人、豊かな緑、蘭学や近代医学の発祥地、城下町として親しまれ、この春、全国で六番目の有料老人ホーム、ゆうゆうの里が開設される。古くから住んでいる市民にとって、有料老人ホームそのものの存在は慣れぬ、また新住民にとっては、高価な買い物になるだろう。高齢者人口の増は市にとっては、医療費の増もちなるとなるが、とにかく確実に高齢化社会へ向かっている。こうした中で、佐倉市のほぼ中心、医療、交通、自然等恵まれた環境の中に、高齢化社会をめざすエリアがある。ここは旧堀田の殿様の別邸跡で、広い敷地は桜の名所と共に四季折々楽しめる名園があり、ここに成人病を専門とする佐倉厚生園、左に県・市の補助の特別養護老人ホームさくら苑、右にゆうゆうの里、という配置である。

この名園の一隅の庭園記念館で去る二月一六日、一日「地域で老いを支える」学習会をする機会が設定された。

午前は、さくら苑長、片山進氏の「みんなで考えよう豊かな高齢化社会」の講演、「ゆうゆうの里」見学会。午後は、熟年一〇番の芹澤茂登子氏の「家族の様な悩みと生き方」、樋口恵子氏の「地域で老いを支える」講演がプログラムで、定員二五〇名の制限をはるかに超え終日熱心な学習が続けられた。

ボランティアグループから、会を組織したが、具体的活動方法がわからない。老人介護講習を受けたので、地域社会に役立てたいがどうしたらよいか。グループ相互の交換（悩み・活動のあり方等）、情報の伝達の場合が必要等々の意見、また個人からは、市の老人施策、施設、生涯学習の機会の増、情報、地域でのつながりについてなど様ざまな声があった。テーマバンクの整備、コーディネーターの役割、グループ相互の情報交換の機会づくり、学習機会の拡大等々、老いの社会へのリーダーシップを求めていることが



痛感され、地域の公民館活動の今後のあり方を知らされる思いがした。

一日の学習が、地区公民館事業が多く市民の共感を呼び、たいへん実りあるものであった。

これらの有機的なつながりこそ、高齢化社会を生きる基礎であると思うものであり、今後、これ等のつながりを大切に、地域公民館事業の充実をはかりたいと思う。

施設に思うこと

久保 育子

板橋区上板橋二―四八―二―五〇七

去る二月一六日、四月オープンの「倉ゆうゆうの里」の見学のご案内を頂き、特養ホーム「さくら苑」にも伺うとのことで、久々に苑長に御目もじ出来まますことを楽しみに参加。苑長とは六年前熱海での老問研の集会からのご縁で、御人柄に惹かれて会の方々と何回か見学したこともありました。

埼玉の戸田市立軽費老人ホームに毎週友人（元会員）を訪ねて七年、私の住む区の特養ホームに毎週火曜日に裁縫関係の仕事に通い出して二年、その他の施設のあちこちに友人を月一回訪ねることを心がけておりますが、遠隔の地として思うにまかせません。

軽費は外出は自由で、個室故住みよい所ですが、足腰が弱るとホームは出ななければなりません。ホームの皆様は先き行きに大きな不安を抱いていられます。

一方特養は生活の場としての心配りが種々なされておりますが、一人での外出は余り許可されておられません。八王子のあるホームに桜のころに花見をご一緒にと満開の日を選んで訪ねても一週間前に申請が出されていないとて許可が下りず、がっかりしたものです。毎日散歩に出たい、それだけが最大の願いと涙ぐまれる彼女を、どう慰めていいか、悲しいこと

お知らせ

「女の定年、男の定年」
マリオン勉強会シンポジウムへの
お誘い・当会後援 ― 六月一〇日（金）

高齢化社会の諸問題について、学者や研究者、実務者などが情報交換、学習を続けている「マリオン勉強会」（座長・都老研部長前田大作氏）主催のシンポジウムが左記のように開かれます。人生のひとくぎりともいえる「定年」について男性、女性、それぞれの立場から、どうとらえ、どう対処するかを考えようという試み。作家のなだいなだ氏のほか、わが会代表の樋口恵子氏、理事の袖井孝子氏、それに当会お

です。地域にケア付き老人住宅が増設されれば現在の特養ホームはもつと緩和される筈です。今話題の中間施設が老人にとっての救いになるかどうか私は疑問に思います。

とにかく若いうちから物心ともに老後の自立を考えておく必要を痛感させられる次第です。

なじみの年金問題評論家の久野万太郎氏がシンポジストとして出席されます。司会は前田氏。「興味ある方、多数のご参加を歓迎します」とは当勉強会の世話を務める朝日新聞記者・小林博氏の言。

・日時 6月10日（金）午後1時半～4時半

・場所 東京・虎の門 全社協ホール（新霞ガ関ビル）

・主催 マリオン勉強会

・後援 東京都福祉局、東京都社会福祉協議会、老人の専門医療を考える会、高齢化社会をよくする女性の会

（資料代 一五〇〇円）

・問い合わせ シンポジウム事務局

03―232―5926

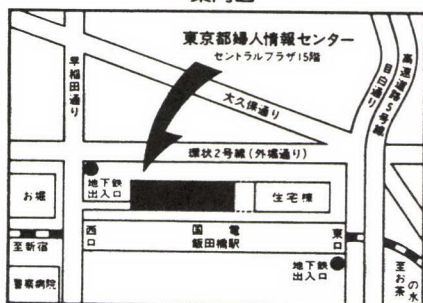
2月、3月入会者

氏名	〒	住所	TEL
中島 民恵	359	所沢市荒幡1030-11	0429-25-3475
金子 昌子	369-02	埼玉県大里郡岡部町岡2740-4	0485-85-2828
渡部 通子	102	千代田区富士見2-14-3	03-239-3906
鯨岡 恵美子	249	神奈川県逗子市沼間5-765-212	0468-71-5685
村瀬 春樹	259-01	神奈川県中郡二宮町二宮1130	0463-71-3784
ゆみこ・ながい・むらせ	〃	〃	〃
岡田 嘉代	331	埼玉県大宮市日進町2-829	0486-65-0183
横田 幸子	299-42	千葉県長生郡白子町浜宿2655	0475-33-3538
浜田 利	192	八王子市打越町1481-157	0426-36-9033
榊原 喜代子	475	愛知県半田市堀崎町2丁目17-3-506	0569-23-1016
木村 久枝	274	千葉県船橋市西習志野1-37-5	0474-66-6855
五十木 陽子	273	千葉県船橋市宮本3-2-29	0474-31-8408
俵 萌子	164	中野区弥生町4-35-1	03-381-5222
〈グループ会員〉 榎目の会	167	杉並区松庵3-12-12-201都留様方	03-331-5822
郡山高齢化社会をよく する女性の会	963	郡山市高田町字池向32-4高橋玲子様方	0249-51-1902
〈賛助会員〉 鈴木 威雄	420	静岡県紺屋町11-17 桜井第1共同ビル8F鈴木倉庫(株)	0542-53-7833

2月、3月住所変更

江利 富美子	260	千葉市真砂2-15-5検見川パークハウスC907	0472-79-7788
山下 正子	154	世田谷区豪徳寺2-31-5宮坂ビル2D	
田中 寿美子	143	大田区大森西4-9-8-205	03-762-2119
藤岡 絹恵	207	横浜市緑区さつきが丘8-49	045-972-5318

案内図



●国鉄/中央線(総武線) 飯田橋駅
●地下鉄/東西線・有楽町線 飯田橋駅

東京都婦人情報センター

〒162 東京都新宿区神楽河岸21の1 セントラルプラザ15階
☎ 03 (235) 1140

場所 東京都婦人情報センター(飯田橋)

日時 六月四日(土)
午後一時半～四時半

■六三年度総会について
五月は二三日(月)です。六月は二七日(月)です。

■オープンハウスのお知らせ
了承下さい。

三月より続々と会費が寄せられ、皆様のご厚意に心より感謝いたしております。納期変更について説明不足の点がありましたため、何人かの方からお問い合わせをいただきましたが、今回お支払いいただいた分は六四年三月分までですのでご了承下さい。

事務局だより